
不思議な国のアリスン1

ナナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議な国のアリスン1

【Nコード】

N5253BA

【作者名】

ナナ

【あらすじ】

不思議な国のアリスのパロディーです。

私はアリスンといいます。不思議の国のアリスではありません。

「不思議な国に行きませんか？」

と、頭の中に響いた突然の声に誘われるまま――

それは夢なのか本当に起こったことなのか分かりません。

何をどうしていたのか、自分の身に起こったことなのに覚えていないからです。

――気がついたらウサギの後を追っていたのです――。

そしてアリスンは穴に落つこちて不思議な部屋にたどり着いたのでした。

「何なの?!この部屋!!」

そこには、白い壁で囲まれていました。窓はありませんでした。

ただ、小さくて通れもしない扉が1つあるだけです。

これはアリスと同じですね。

「アリスと同じね!? それなら私もわかるわ!!」

アリスンは自信に満ちた声で言いました。

お決まりの部屋の中央にはテーブルがあつて、クッキーと小瓶がありました。

アリスンは迷わずそれらを口にしました。

小瓶の液体を飲むと、体がオツきくなりました。

次にクッキーをかじると、体がちっさくなりました。

とりあえず小さくなったのを利用してアリスンは、目の前の扉を開けて進みました。

扉を抜けるとそこは綺麗な花がたくさん咲いていました。アリスンの身体は、元のサイズに戻っていました。安堵して、綺麗だと見

惚れていると、急に話しかけられました。

「おい、おまえはだれダツ!？」

「ダレダツ!？」

「誰だつ!？」

「ダレだつ!？」

相手は怒っているようでした。しかも大人数。

声のした方をアリスンは振り向きましたが、誰一人として居ませんでした。

あるのは綺麗な花くらいで……

そういえば、アリスの話では花がしゃべっていたような……いや、そんなことがあるはずがない。

しかし、さっきはあんな薬?があつたくらいだしねえ。

あれこれ悩んでいると、ドスツと後ろから誰かに肩を叩かれました。

そつと振り向くと、アリスンと同じぐらいの大きな芋虫がこつちを見えていました。

その芋虫は、赤黒く醜く太つて、口らしき辺りから、だらだらと唾液を垂らしていました。超大型犬並みの、いわゆる巨大芋虫です。耐え難く『気持ち悪い』としかいいようのない姿なので、アリスンは『キモ虫』とひそかに名づけました。

おまけに青臭くてたまらないので、十歩ほど後ろに下がりました。するとキモ虫は九歩前に進んで来るではありませんか。

どうも、アリスンを襲うつもりのようです。

「食べる気なの? いや、私、おいしくないから、病気になるよお」

周りからはケタケタと甲高い笑い声が、どこからともなく聞こえてきます。

アリスンは注意深く見回しますが、やはりあるのは綺麗な花、花、花。

そこで、じつと目の前の黄色い花を観察してみました。するとその

花の茎が、クネクネと動き始めるではありませんか。

ついでに笑い声もあげて、

「アハハー、いい気味ね?」

「食べられちゃえば?」

と、芋虫をそのかします。

「うわぁ!？」

アリスンはつくづく、変な世界に来たんだなあと心から後悔しました。

こうなったら、逃げるっきゃない!

対処方は、それしか頭の中には浮かびません。

巨大芋虫と、じっと目を合わせたまま……………

ぱつと振り返ると一目散に走り出しました。

ドスン、ドスン、地響きが追いかけてくる。

振り向かなくても、その気持ちの悪い化け物が背後へと迫ってくるのが感じられました。

でも逃げるしかない。

逃げながらアリスンがクネクネと動く花を踏みつけると、花が悲鳴を上げました。

「痛いじゃないの、やめてよね!」

花たちは、そういうとアリスンを睨みました。

「ごめんなさい、わざとじゃないのよ?」

アリスンは右手を振って誤りながら、器用に地面を選んで走り続けました。

ぶしゅっ、ぶしゅ、しゅううう。キモ虫は、悲鳴を上げる花たちなどお構いなしに、口から唾液を飛ばしながら、進んできます。

「あっちへいけ……、寄るなあつ」

絶対に捕まるもんかっ!!

と、アリスンは全速力で突っ走りました。

「止まって」

「助けて」

さっきまで人を馬鹿にしていた花たちが、アリスンに懇願してきました。やがて、いっせいに顔を向けて、

「お願いだから、逃げないで！」

「お願いだから、止まって?!！」

と、合唱しました。その歌声は、エコーまで掛かり、すごい音量となって、周りに響きました。

そしてアリスンはついに――――

「うるさ?い」

怒鳴って、耳を塞いで、しゃがみ込んでしまいました……。でも、頭が丸見えです。

「ああっ、もつと小さくならなくちゃだめよっ」

と、ぼやいた瞬間、いい事を思いつきました。

魔法のクッキーがあるじゃんか

アリスンは、急いでスカートのポケットに残っていた魔法のクッキーをかじりました。

あれよあれよと、ちいさくなって、花たちからも、キモ虫から見えなくなってしまうました。やがて、彼らとの距離は少しずつ開いていったのでした。

走るのに疲れて、気がつくところにはきれいな庭のあるお城でした。

目の前をトランプがよろよと歩いて行きました。(しかも人間の顔が付いていました) 両手にペンキのバケツを持って……………

・

「はあっ、これでいいかい？」

真っ赤な顔をして、息を切らせながらバケツを運んだスピードの3が仲間に確認しました。

「刷毛を洗ってこいと言ったじゃないか」

しかめ面をして、ハートの6が言いました。

その隣はダイヤの8でした。

「ペンキの色は黄色だと言っておいたのに、それは赤じゃないか」

「オレはこの赤の方が好きなんだよ！」

スピードの3が喚きました。話がかみ合っていません。それぞれが勝手に思ったことを言っています。

アリスンは、おもしろくなって聞き耳を立てました。

横から見ると、彼らランプ達の体には厚みがありませんでした。ペラペラのヒラヒラです。良くあんな重い物が持てるわね。

「刷毛が無ければ、そもそも塗り変えることだって出来やしない。いったいどうすればいいんだ」

そうハートの6が言った時、白バラの後ろに隠れていたアリスンに気が付きました。

「そうだ！！こいつの髪の毛を使えばいいぞ」

「誰か、縄をもってこい」

ダイヤの8がハシゴの上から言いました。

「ハサミはどこだ？」

スピードの3が辺りを見回しました。

「なによ黙って聞いていれば、私を刷毛代わりにするですって」

アリスンは、怒ってランプ達の前に出ていってしまいました。

「というかこいつ誰だ？」

大雑把らしいランプ達は、やっとそう尋ねました

「私はアリスン。14歳のかわいい女の子よ」

自分でかわいいと言ってしまった。はずかし……ぜ フン

「それより、何であたしの綺麗な髪の毛を使うのよ」

アリスンがそう言うと、ハートの6はじととした目付をしました。

「綺麗？はんつ、この国では女王さまの髪が一番綺麗なのさ」

偉そうにふんぞり返りながら、彼は言い切りました。

「おい、お前の髪は、ボサボサでチリチリじゃないか刷毛にしたほうが役に立つぞ」

スピードの3は、痛い所を突いてきました。本当はアリスンは、艶の無いクチャクチャの茶色いくせつ毛がコンプレックスだったので。

馬鹿にされたアリスンは悔しくて涙が出そうになり、下を向いてしまいました。

そして、ふっと彼らの足元に視線を向けると、刷毛があるではないですか

「刷毛落ちテンジャンー!!」

するとダイヤの8はしれっとして、

「知っていたさ」

と言いました。

「知ってたの？ そうなんだ。じゃあもう、私に用は無いわね」

小憎らしいランプ達ね……。アリスンはそう思いながら話を流しました。

うーん。『不思議の国のアリス』話だと、この辺で女王様が出てくるはずなんだけど……

アリスンが、そう懸念していると。

「何をしている。バラは黄色だといっただろう！ まだ終わらんのか？ こんな使えんやつらは処刑だ！」

美しい顔からは、考えられないような怒鳴り声を発した女王様が現れました。

5メートル先の豪華な門の前で、黄金の冠を付け、豊かなプラチナブロンドの髪を激しく揺らしながら、扇子を振り回して怒っています。

アリスンは、あっけにとられてその様子を見つめてしまいました。こわーい、こわーい。

それにしてもほんとに綺麗ね、女王様の髪……………

「女王様、そっそれだけは……」

お付のスペードのジャックが、慌てて止めようとします。

「ええい、黙れ」

女王が言ったその時、ハートの6が後ろから、スペードの3を羽交い絞めにして、こう訴えました。

「コイツが、黄色は嫌だといって、邪魔をするのです。こいつを処刑してください」

スペードの3は、抵抗しながら、

「違います。こいつがこのままでいいと言って邪魔するんです」

「私が処刑してやる」

急にダイヤの8が、園芸バサミをチヨキチヨキさせながら、二人に切りかかるうとします。

「ええーい、私に意見するとは何事じゃ！お前達、全員処刑じゃ」

イライラした女王様は、ドストスとアリスン達のところまで近づいてきました。

「そなたは、何者じゃ？」

たった今、アリスンに気がついたような怪訝な顔をしています。そして、ジロジロと上から下まで見定めているように、視線を走らせました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5253ba/>

不思議な国のアリスン1

2012年1月14日16時53分発行